

#### 4) 下垂体腫瘍の HE 像

今井 幸弘 先生

(神戸市立医療センター中央市民病院・臨床病理科)

手術的に緊急性のない症例が多いためか、専門の脳外科医に集中しているようで、近年、下垂体腫瘍の病理標本を見る機会が減ったように思います。そもそも下垂体腺腫は組織像が単調で、産生ホルモンを染めてみても、いまだき術前に一通りのホルモン検査はすませているので、分泌が多くて胞体に溜まってないのとか、産生が多い割に分泌が少なくて胞体内に溜まっているものがあるのがわかる程度で、あまり clinical な impact もありません。周囲の海綿静脈洞に浸潤しても adenoma であつたり、biological な性格以外に外科医の腕の方も再発率に影響したり、病理医にとってはあまり面白いものではありません。しかし、たまに見せられると、線維化や諸般の事情で挫滅していたりするとかなり困惑させられますし、unusual な像を見ると「これでよかったっけ？」となやむこともあります。

下垂体の組織解剖、adenoma の基本構造、ときに見る変わった像、頭蓋咽頭腫、ラトケ嚢胞 や髄膜腫の典型像などを皆さんと一緒に、review したいと思います。